

研究ノート

1360 年代キエフの銀貨について

On Silver Coins at Kiev in 1360s

安 木 新一郎

YASUKI Shinichiro

抄録

14 世紀後半になりモンゴル帝国が解体されていくと、ジョチ朝（キプチャク・ハン国）は銀不足に陥った。ジョチ朝の属領ルーシでは独自硬貨は発行されてこなかったが、1360 年頃から各都市でジョチ朝銀貨を偽造した銀貨が作られるようになった。特にリトアニア大公国領のキエフでは、アラビア文字に似せた意匠をもつ軽い銀貨が発行された。

キーワード

貨幣、モンゴル、ジョチ朝、キプチャク・ハン国、リトアニア

1 はじめに

現在のロシア中央部と北西部、ベラルーシ、ウクライナ中西部はかつてルーシと呼ばれていた。1236年から1242年に、チンギス・カンの長男ジョチの子バトを総司令官とするモンゴル軍により、現在のカザフスタンからドナウ河口にいたるキプチャク草原と、ルーシを含む草原に隣接する地域が征服された。モンゴル帝国の北西はジョチ朝（キプチャク・ハン国）が支配した。

先行研究ではジョチ朝の硬貨¹⁾はルーシではあまり流通しなかったとされている²⁾。しかしながら、デンガ денга（銀貨の名称。現在の貨幣一般を表す名詞 деньги の語源）、プロ пуло（銅貨）、アルティン алтын（銅貨）、コペイカ копейка（銀貨。現在はルーブルの百分の一の呼称）³⁾など、貨幣に関する用語がテュルク語からの借用語で占められており、ジョチ朝支配期に、ジョチ朝の幣制の影響を受けてルーシの幣制が形成されたと考えられる。

本稿では、おもに1360年代のリトアニア大公国統治下にあるキエフで発行された銀貨を見ることで、ルーシにおけるジョチ朝硬貨の流通について論じる。

なお、本稿で掲載する硬貨の画像は、東洋硬貨データベース ZENO.RU – Oriental Coins Database (<https://zeno.ru>) から転載したものである。同サイトの検索窓に本稿で明示した数字を打ち込むと、該当する硬貨の画像を見ることができるので、参考にしていきたい。

2 リトアニア大公国の成立とジョチ朝

バルト海東岸にはエストニア、ラトヴィア、リトアニアの3つの独立国があるが、13世紀にはドイツ騎士修道会やデンマークなど西欧カトリック勢力の支配下に置かれ、原住民のカトリックへの改宗と奴隷化、ドイツ人の入植がおこなわれた（山内1997）。こうした中、リトアニア人だけが民族国家形成をなしとげた。

リトアニア軍には歩兵や弩兵がいたとされるが、主力はモンゴル式の軽騎兵だった。リトアニアにはジョチ朝から馬が供給され、軍事顧問団も派遣されていたと考えられる。強力な騎兵が編成できたこともあり、リトアニアは周辺諸国から独立を守っただけでなく、ポーランドと連合して、中世の欧州最大の版図をもつ

国家に成長した。

中世の国家の場合、一般的であるが、リトアニアも分権的であり、軍事・外交において統一的な動きが取れていたわけではなかった。1253年にリトアニア首長のミンダウガスはローマ教皇インノケンティウス4世により王に任じられた。そのかわりカトリックに改宗し、ドイツ人商人や農民の移住を認め、ドイツ騎士修道会との関係強化を目指した。こうした親カトリック政策に抵抗する勢力もあり、1260年にリトアニア諸侯の軍は修道会軍を破った。おそらく1262年にミンダウガスは棄教し、ウラジミル大公アレクサンドル・ネフスキーと同盟を結んだ(エイディンタス他2018)。

インノケンティウス4世はリトアニアだけでなく、同じく1253年にハルィチ・ヴォルィニ大公ダニールにも王位を授け、ジョチ朝の侵攻に備えようとしたが、ダニールはブルンダイ率いるジョチ朝軍に攻められ降伏した。また、ミンダウガスはジョチ朝に服属するアレクサンドル・ネフスキーを通じて、ジョチ朝との関係を強める意図を持っていたと考えられる。インノケンティウス4世による、リトアニアとハルィチ・ヴォルィニを使ったジョチ朝抑え込み政策は破綻した。

1263年にミンダウガスが暗殺されて以降も、リトアニアはドイツ騎士修道会、ハルィチ・ヴォルィニ大公国、ポーランド、ルーシ諸公など周辺諸勢力との絶えざる抗争の中におかれた。リトアニアとハルィチ・ヴォルィニは、ジョチ朝と西欧カトリック勢力の緩衝地として機能していた。

14世紀に入りハルィチ・ヴォルィニで大公家が絶えると統一が失われ、リトアニアが勢力を拡大していき、現在のベラルーシに加え、キエフ、スモレンスク、ブリャンスク、クルスクなど広大な地域がリトアニア領となった。ジョチ朝はハルィチ・ヴォルィニ大公からではなくリトアニアから貢納を受け取るようになった。リトアニアはジョチ朝にとって重要な属国になったのである。

3 ルーシの偽造銀貨

至正8年(1348年)に浙江で方国珍が反乱を起こすと、元朝は徐々に江南を治めることができなくなり、政治的・経済的混乱が激しくなっていた。1350年代に入ると、ユーラシア全域で銀不足が露わとなった。東方から西方への銀の移動

が滞るようになったからだと考えられる（黒田 2020）。

ジョチ朝では、1359年に当主ベルティベクが暗殺されて以降、当主が頻繁に交代する中、諸王（チンギス・カンの男系子孫）ではなく、チェルケスやママイのような万人長や、公主（チンギス・カン家の女性）の名を刻んだ硬貨が作られた。貨幣発行権がジョチ家当主の専有ではなくなってきたのである。

ジョチ朝の属領であるルーシでは、グリヴナと呼ばれる量目約 160 グラムおよび 200 グラムの棒状の銀塊、ジョチ朝やベーメン（チェコ）の銀貨、貝貨（キイロダカラ）、木綿などが貨幣として使われていた。すなわち、ルーシでは独自硬貨は発行されておらず、この期間は「無硬貨期」と呼ばれている。

1360年代に入ると、元朝およびジョチ朝における政治的混乱により、ルーシへの銀および貝貨の流入量が減ったと考えられる。

リトアニア大公国治下のキエフで 1362 年頃から銀貨の製造が開始された。これを皮切りにルーシ各地で独自硬貨の発行がおこなわれるようになった。独自硬貨にはデング銀貨 денга とプロ銅貨 пуло の 2 種類があり、それぞれジョチ朝のアクチェ銀貨（テュルク語でテング）とプル銅貨の名称を借用したものである。

ルーシの独自硬貨の製造は、ジョチ朝銀貨の偽造から始まった。例えば、トゥーラ Тула では一方の面にはウズベクの硬貨、もう一方の面にはジャニベクの硬貨を模した文字や模様の刻印された銀貨が見つかった（図 1）。また、クルスクではトクタミシュの銀貨を偽造したものが発見されている（ZENO.RU, 25076）。こうした偽造銀貨に刻まれているアラビア文字は判読可能なものが多い。

これに対して、キエフで作られたと考えられている偽造貨幣には、アラビア文字のようなものが刻まれているが、でたらめなものである（図 2）。

トゥーラやクルスクなどで見つかる偽造銀貨を作った製造人はアラビア文字が読めたか、あるいは打刻用の器具をジョチ朝から手に入れたのかもしれない。おそらくジョチ朝の貨幣製造人が移住したのだろう。

一方、キエフの銀貨は現地の金銀細工師がみようみまねで偽造したものと思われる。突然ジョチ朝から銀が入ってこなくなったので、地元の市場で銀貨需要を満たすために急ごしらえで作られたものだと考えられる。

もしジョチ朝から正式に硬貨発行が認められたのであれば、トクタミシュ（在位 1377 年～1406 年）に服属したモスクワのように、ジョチ朝当主に言及した合

法的な銀貨が作られたであろう（図3）⁴。この場合、鑄造所にはバスカク（モンゴル語でダルガ。ジョチ朝の代官のこと）が派遣され、アラビア語の文言や模様など、硬貨の様式に関する指導が入ったはずである⁵。

14世紀後半にアラビア文字あるいはこれに似せたものが刻印された偽造銀貨が作られたことは、ルーシでは以前からジョチ朝銀貨が流通しており、地元市場ではジョチ朝銀貨が信認を得ていたことを示している。

ルーシの人びとはアラビア文字が読めなかったはずだが、アラビア文字やそれらしい何かが刻印されていれば、従来から流通していたジョチ朝硬貨と同じように取り扱ったのだと思われる。概して、トクタミシュ期までのジョチ朝銀貨の銀含有率は96.5パーセントと高く良貨である。

フョドロフ・ダヴィドフは、ルーシではジョチ朝硬貨はあまり流通しなかったと述べているが（Фёдоров-Давыдов, 1985）、現存する偽造銀貨から、ルーシの市場ではジョチ朝銀貨が好まれていたと言えるだろう。

4 おわりに

リトアニア治下のキエフを含むルーシの各都市では、1360年代からジョチ朝銀貨を基とする偽造硬貨が作られた。先行研究では、ルーシにおいてジョチ朝銀貨はあまり流通していなかったとされるが、偽造銀貨の状況から、ルーシでジョチ朝銀貨は信認されていたことが分かる。

モスクワ大公国に統合される北東ルーシの各都市では、ジョチ朝の銀貨を偽造するだけでなく、独自の文言や意匠をもつ硬貨を発行するようになる。同じ公国内でも、支配する公が異なると意匠も違う（Прохорова, 2007）。貨幣発行権は諸公が握り、のちにモスクワ大公に集中することとなった。

リトアニアの支配するキエフでも、キエフ公ヴラディミラス（在位1362年～1394年）の統治期間の末期にあたる1388年頃から独自硬貨が作られた。その後、リトアニア大公の代官が派遣されるようになると、ジョチ朝銀貨にリトアニアのタムガ（占有標。家畜等に付す印、烙印）を打刻するようになる。

キエフでは貨幣供給をジョチ朝からの流入に頼っており、その後も政府が貨幣発行権を掌握できなかったと考えられる。15世紀になってからも市場はジョチ朝

銀貨でなければ受け取りを拒否し、政府はリトアニアのタムガを上から打刻することしかできなかったと思われる。

リトアニアのタムガが打刻されたジョチ朝銀貨については、別稿で検討したい。

図1 2種類の銀貨から意匠をもってきた偽造銀貨（トゥーラ出土、量目 1.12 グラム）（ZENO.RU, 117231）



注) 左側がウズベクの銀貨、右側がジャニベクの銀貨を借用したもの。

図2 リトアニアの偽造銀貨（キエフ製造、直径 11 ミリ、量目 0.38 グラム、製造年 1362 年頃）（ZENO.RU, 226022）



注) ジョチ朝のアクチェ銀貨（量目 1 ダング=0.78 グラム）の半分程度の重さしかない。1360 年代の銀不足の状況がうかがえる。

図3 ドミトリ・ドンスコイの銀貨(モスクワ製造、量目 0.97 グラム)(ZENO.RU, 283682)



注) 左面に「大公ドミトリ」、右面に「スルタン・トクタミシュ、長命であらんことを」と刻まれている。

参考文献

- エイディンタス、A.、ブンブラウスカス、A.、クラカウスカス、A.、タモシャイティス、M. (梶さやか、重松尚訳) (2018) 『リトアニアの歴史』、明石書店。
- 加藤一郎 (1991) 「ロシア貨幣概史-1-最近の諸研究を土台とした 15 世紀初頭までの記述」『文教大学教育学部紀要』、25。
- 川口琢司・長峰博之 (2016) 「十五世紀ジョチ朝とモスクワの相互認識：ロシア語訳チュルク語文書を中心に」、小澤実・長縄宣博編著 (2016) 『北西ユーラシアの歴史空間：前近代ロシアと周辺世界』、スラブ・ユーラシア叢書 12、北海道大学出版会。
- 栗生沢猛夫 (2007) 『タタールのくびきーロシア史におけるモンゴル支配の研究』、東京大学出版会。
- 黒田明伸 (2020) 『貨幣システムの世界史』、増補新版、岩波現代文庫。
- 前田直典 (1973) 『元朝史の研究』、東京大学出版会。
- 安木新一郎 (2019) 「中央アジア・ブハラで作られた漢字の刻印されたディルハム銅貨」『京都経済短期大学論集』、26 (3)。

安木新一郎 (2021) 「大モンゴルの小額貨幣：ジョチ朝（キプチャク＝ハン国）における銀貨・銅貨交換比率について」、岩橋勝編著 (2021) 『貨幣の統合と多様性のダイナミズム』、晃洋書房。

山内進 (1997) 『北の十字軍：「ヨーロッパ」の北方拡大』、講談社選書メチエ 112。

Орлов, А. и Борисенко, Н. (2007) От монет пришельцев : к рублям и копейкам, Банкаускі веснік, ЛПЕНЬ.

Прохорова, Н.В. (2007) Монеты и банкноты России, ООО Дом Славянской Книги.

Фёдоров-Давыдов, Г. А. (1985) Монеты-свидетели прошлого, М.

ZENO.RU-Oriental Coins Database(<https://www.zeno.ru/>). (最終閲覧日：2022年2月10日)

注

¹ ジョチ朝の幣制については、安木 (2021) を参照。

² ジョチ朝とルーシの幣制の関係に関する邦語文献として加藤 (1991) があるものの、自身で書かれているように、従来のソ連における研究を要約・整理した論考である。ロシア語圏の研究者の中には、ルーシに対するジョチ朝の影響がないあるいは軽微であることを論証したがる者が多い (栗生沢 2007 を参照)。

³ コペイカはチャガタイ家当主ケペク (犬を意味するテュルク語) の発行した銀貨ケペキに由来する (Орлов и Борисенко, 2007)。

⁴ 14 世紀末から 15 世紀初頭のジョチ朝とルーシの関係については、川口・長峰 (2016) を参照。

⁵ モンゴル帝国では紙幣や硬貨の製造所は徴税に関するダルガ (代官) の管理下にあったと考えられる (前田 1973) (安木 2019)。